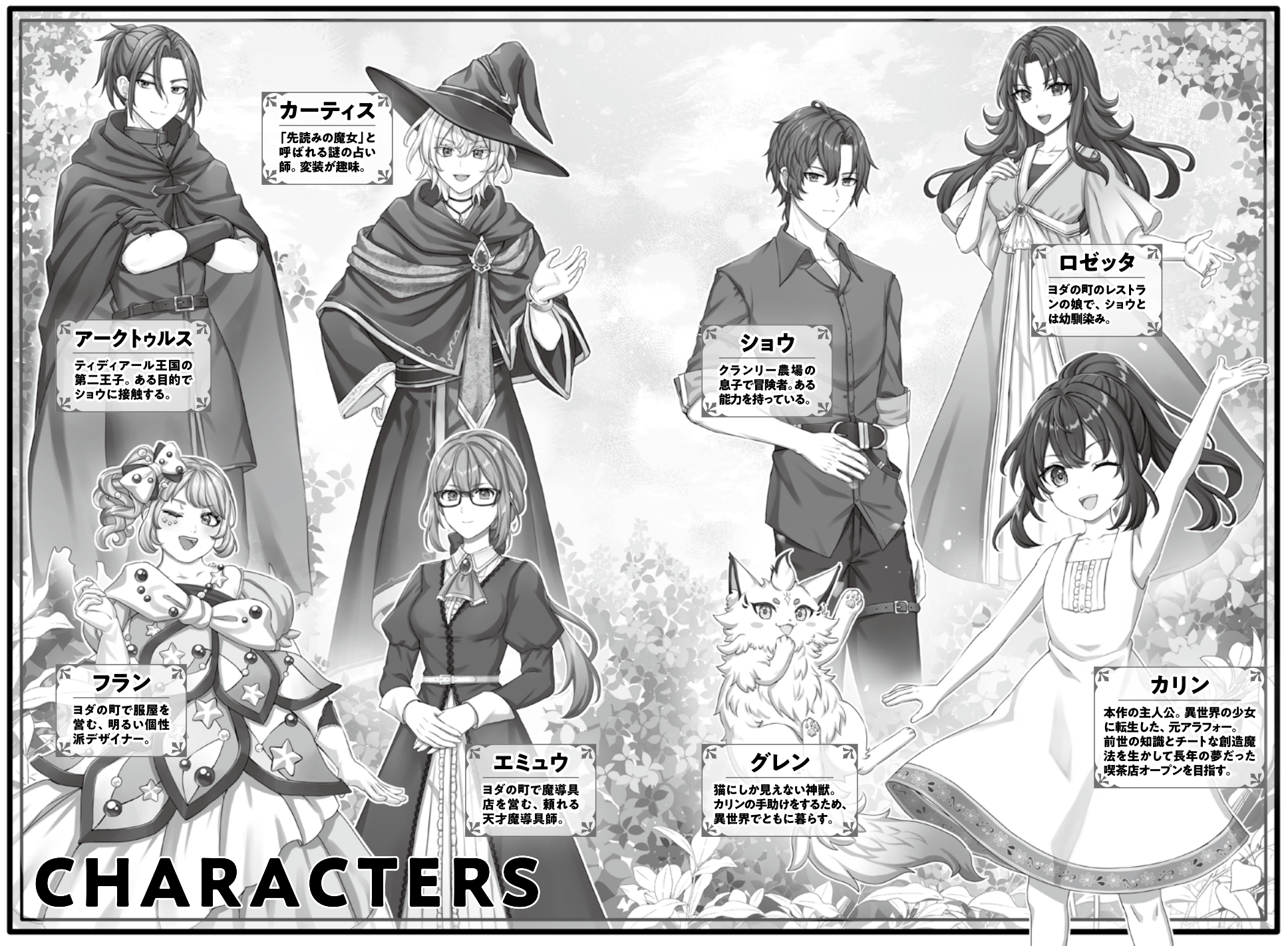
転生少女は異世界で理想のお店を始めたい

猫すぎる神獣と一緒に、
自由気ままにがんばります！

2

Umemarumikan
梅丸みかん
Illust. にゃまそ

Tenseishojo ha isekai
de risonoomise wo hajimetai


カーティス
「先読みの魔女」と呼ばれる謎の占い師。変装が趣味。
アークトゥルス
ティディアール王国の第二王子。ある目的でショウに接触する。
ショウ
クランリー農場の息子で冒険者。ある能力を持っている。
ロゼッタ
ヨダの町のレストランの娘で、ショウとは幼馴染み。
フラン
ヨダの町で服屋を営む、明るい個性派デザイナー。
エミュウ
ヨダの町で魔導具店を営む、頼れる天才魔導具師。
グレン
猫にしか見えない神獣。カリンの手助けをするため、異世界でともに暮らす。
カリン
本作の主人公。異世界の少女に転生した、元アラフォー。前世の知識とチートな創造魔法を生かして長年の夢だった喫茶店オープンを目指す。
CHARACTERS

第一話　出店メニュー

料理が得意な私、奄美根花欄(あまみねかりん)は、自分のお店を開くという夢の実現を目前に、白猫を避けようとして事故に遭い、命を落としてしまった。目を覚ました場所は、真っ白な世界。そこで出会ったのは、女神様と事故の原因となったあの白猫だった。

白猫はグレンという名で、なんと女神様の眷属(けんぞく)で神獣だという。私が命を落としたお詫びに、女神様は自分が守護する世界で夢を叶えることを提案してきた。「創造魔法」と、店舗付きの家まで用意してくれるという高待遇で。私はその提案を受け、異世界で「カリン」として、新たな人生を歩み始めることにした。

転生した私は、森の中にある店舗付きの赤い屋根の家で、私の守護役となったグレンと暮らし始めた。そして、森を散策していて出会ったのが、クランリー農場のラルクと父親のダンテさん。その後、クランリー農場の人たちに助けられながら夢を追いかける私。

けれど、ここでは前世のように、食材も道具も揃っていない。私は創造魔法で少しずつ必要な道具を生み出し、食材探しをしていた。

ある日、私はヨダの町で洋服店を営むフランさんと出会い、お祭りで屋台を出せるチャンスがあ

ることを教えてもらった。紹介状をもらい、出店を決めた私は、いよいよ異世界で夢の第一歩を踏み出すことになった。

◇◆◇

出店を申し込んでから、三日が経った。
屋台で販売するメニューを色々考えてはいるものの、なかなか決められずにいる。
手元の資金も心もとないし、お祭りである程度稼がなければ今後が少し不安だ。
生活費はそこまでかからないけれど、将来的に店を構えるとなると、準備も必要になってくる。
あれこれ考えているうちに、だんだんと頭が重くなってきた。
私は厨房の椅子に腰かけ、頬杖をついて考え込む。
「ねぇ、グレン……お祭りで出すメニュー、何がいいと思う？」
『某はなんでも構わぬぞ。カリンの料理はどれも美味いからな』
「グレンの好みじゃなくて、お客さん向けよ」
『うむ、それは分からぬ。料理の種類は知らぬのでな』
「まあ、ちょっと聞いてみただけよ」
隣の椅子で丸くなったまま、顔だけこちらを向けるグレン。

呆れた顔のグレンをスルーして、再びメニューのことに考えを巡らす。
やっぱりスイーツがいいかもしれない。
他の屋台はどんなものを出すんだろう？
フランさんは髪飾りやリボンを売るって言ってたし……エミュウさんは新作の魔導具を持ち込むらしいけど、詳細は「当日のお楽しみ」なんて言って、教えてくれなかった。
市場の人たちも出店するのかしら？　一般の人が手作りの物を売る場合もあるとフランさんが言っていたわね。
まるでフリーマーケットのようね。
そうねぇ、屋台だから立っていても食べられるものがいいかしら？　でもテーブルとベンチくらいは用意されているのかも。初めての異世界でのお祭りだから分からないわ。
となると、手軽に食べられて人の目を引くもの……クレープなんてどうかしら？
うん、とりあえず、実際に作ってみようかな。

卵と牛乳、小麦粉を混ぜて生地を作り、熱したフライパンで薄く焼く。
小さく切ったフルーツをたっぷり乗せて、その上にふんわり泡立てた生クリームを乗せ、くるくると巻く。上にも生クリームを絞って、細かく切ったフルーツを乗せてみた。
早速試食してみる。

生クリームとフルーツたっぷりのクレープは、見た目も可愛らしい。
『パンケーキなるものも美味かったが、これも美味いな』
グレンの評価も上々だ。
うん、確かに美味しいけど……でも屋台で販売するとなると、少し手間がかかりすぎるかも。
お客さんを待たせてしまうのも申し訳ないし……
そういえば、アイスクリームを包んだクレープも見たことがあったわね……
アイスクリーム……夏だし、冷たいものがあると喜ばれるかもしれない。
カップに盛って渡すだけだからスムーズだし。
ようし、決めた！　アイスクリームにしよう！
材料の牛乳や卵もクランリー農場で手に入るし、砂糖もこの前ゲットした。
メニューが決まったらすぐに準備に取りかからないとね。
ミルクのアイスクリームもいいけど、もっと彩りが欲しいわ。
そういえば、この前森でベリーの実を見つけたわね。
まだあの場所にあるかしら？　後で確かめに行こうかな。
あとは……そうだ！　ミントを加えたミルクアイスは、昔からお気に入りだった。爽やかな香りが甘さを引き立ててくれるのよね。
私が以前市場で買ったミンティー茶を使えば作れそう。

これでメニューが決定した。
シンプルなミルクアイス、ミントミルクアイス、ベリーアイスの三つだ。
早速、以前ベリーを採取した場所に行ってみると、まだ赤い実がたくさん生(な)っていた。これでベリーアイスを作ることができる。
きっとベリーの実は白いミルクアイスに彩りと、一味違う美味しさをもたらしてくれるだろう。
籠いっぱいに摘んできたベリーで、すぐにジャムを作った。砂糖を入れなくても十分甘かったので、レモンを数滴垂らして少しだけ酸味を付けた。
ミンティー茶の葉は、フードプロセッサーで粉末状にする。
さて、下準備はオーケー。それでは基本のミルクアイスを作りましょう。
卵をボウルに入れてよくかき混ぜ、砂糖を入れる。よく混ざったら少しずつ牛乳を入れて、かき混ぜながら火にかける。火加減は弱火で沸騰する前に火から下ろす。
出来上がったミルク液をバットに入れて冷やす。
前世では冷凍庫で数時間かかったけど、ここでは魔導レンジがあるのですぐできる。便利ね。
一度、半分だけ凍らせてかき混ぜる。それを三回ほど繰り返すことで、空気が含まれてふんわりとした口当たりになる。これで、前に作った時と同じ仕上がりになったわ。
ミルクアイスができたので一口スプーンですくって味見してみる。

「うん、美味しくできたわね」
……ん？　視線を感じる。金色の瞳が、ジッとこちらを見つめていた。
私はお皿にミルクアイスを乗せて、グレンの前に置いた。
「とりあえず味見だから少しだけよ」
『かたじけない』
そう言ってすぐにアイスに飛びつくグレン。冷たさでピクリと身体が揺れるのも可愛らしい。
私は続けて、ミンティー茶を入れたミントミルクアイス、ベリージャムをマーブル状に混ぜたベリーアイスを作った。
ミントミルクアイスは薄緑色で、爽やかな味を推測させる。ベリーアイスは白いミルクアイスに赤いベリーがところどころに混じって、華やかで可愛い感じに仕上がった。
うん、どれも満足のいく仕上がり。これならお客さんにも喜んでもらえそう。
私は三種類のアイスを一つのお皿に盛りつけ、グレンと一緒に試食した。もちろん、予想通りの味で美味しい。
そうだわ、せっかくだからショウとラルクに試食してもらおう。約束したしね。
早速、手紙に書き綴る。
お祭りで出店すること、そこで販売するアイスクリームの試食をしてほしいこと……
ついでに牛乳と卵もお願いしよう。この前帰る時セレンさんからチーズケーキのお礼だと言って

たくさんもらったけど、お店を出すとなると足りなくなるかもしれないからね。
全てを書き終えると、私は宅送鳥（たくそうちょう）に手紙をゆだね、さっと空へと放ったのだった。
暫（しばら）くすると、宅送鳥がショウからの返事を携えて戻ってきた。「ラルクもすごく喜んでいる」との一文を見て、私の頬が緩む。
そうだわ！　アイスクリームもいいけど、何か軽食も作ろうかしら？
えーと、何がいいかしら？
私は、今ある食材を確認するために食品庫へ向かう。
うん、ボル肉の塩漬けが少し残っているわね。あとは野菜も結構ある。私とグレンだけだから、そんなに減らないのよね。アイスクリームが甘いから、しょっぱい系が欲しいところね。
そういえば、前世でよく作ってた「ケークサレ」なんてぴったりかも。
ケークサレっていうのは、フランスの料理で、甘くない「おかずケーキ」みたいなものだ。
簡単だし、野菜たっぷりでお肉も卵も入っているから栄養バランスもばっちり。それに、カラフルな野菜を使えば、ちょっとしたパーティーにも出せるのだ。いいことづくしなのよね。
さて、早速作ってみようか。
入れる野菜は、人参、緑豆、コーン。それにボル肉の塩漬け（これは私の中では「ハム」という認識）。結構彩りよく仕上がると思う。

他に使うのは、小麦粉、卵、バター、カッテージチーズ、牛乳、塩、それに胡椒。全部混ぜて焼くだけだから、作るのも簡単。混ぜる順番はあるけどね。
そうだ、前はハーブも入れてたっけ。この世界にもあるのかしら……？
タブレットで調べてみたら、あったあった。なんとこの家の裏に、タイムとオレガノが自生していることが分かった。
すぐに採ってきて入れてみたら、これが大正解。
グレンも「美味い！」って絶賛していたし、間違いない……多分。
写真も忘れずに撮っておいた。メニューに加えるかどうかは未定だけど、記録はちゃんと残しておくに越したことはない。
作りながらつまみ食いしすぎたせいで、グレンと私はもうお腹いっぱい。結局、夕飯はスキップすることにした。

◇
◆
◇

翌朝。カーテンの隙間から差し込むやわらかな日差しに包まれて、私は心地よく目を覚ました。
昨夜はぐっすり眠れたお陰で、気分は上々。
時間を見ると七時。どうやら昨日とは違って、ちゃんと早く目を覚ますことができたみたい。

朝食はストックしておいた玄米おにぎりと、卵とじの野菜スープで簡単に済ませた。
グレンは、『なんだ、ケークサレとかいうものじゃないのか』とちょっとがっかりしていたけど、「ショウとラルクが来てから一緒に食べよう」と言ったら、すぐに気分が浮上したようだ。
よっぽどケークサレが気に入ったんだね。

お茶を飲んだ後、自分の部屋へ行き、キャビネットの上に置いてあった魔導カメラを手に取った。ソファーに座って、これまで料理を作る度に撮ってきた写真を見返す。
うーん、やっぱり調味料が足りないから、料理のレパートリーが限られるなぁ。
そこで、タブレットを使って基本の調味料である醤油、味噌、ウスターソース、ケチャップ、マヨネーズがこの世界にもあるか探してみたけど、残念ながら見つからなかった。
ないなら作るしかないかなぁ？　一番簡単に作れるのはケチャップ……だよね？
『ふむ、どうやらショウとラルクが来たようだぞ』
私が考えに耽っていたら、グレンは二人の気配を察知したようだ。ソファーから立ち上がったグレンのあとを追って、私もドアの方へ向かう。
店舗の入り口を開けて外に出ると、ちょうどショウとラルクがこちらへ向かってくるところだった。ラルクは私の姿を見つけるなり、笑顔で駆け寄ってくる。
「カリン！　呼んでくれて嬉しいよ」

「ラルク、来てくれてありがとう。ショウも」
相変わらず元気いっぱいのラルクの様子に、つい笑みがこぼれた。
「やあ、お祭りで出店するんだって？　手紙を読んでビックリしたよ」
「ふふふっ、そうなの。数日前、買い物に行った時にそこの店主さんに聞いたのよ。お祭りなら紹介状さえあれば誰でも出店できるって。店主さんが紹介状を書いてくれたから、すぐに役場に届けを出したの」
「へぇ、そうなんだ」
「とりあえず中に入って」
私は二人を店の中に案内した。
「へぇ、結構中はしゃれてるんだな」
ショウはエントランスに足を踏み入れるなり、スイングドアやステンドグラスを眺めて感心したように言う。
「うん、ほんと。カリンにぴったりの素敵なお店だね」
ラルクも感嘆の声を上げる。
「ありがとう。そう言ってもらえると嬉しいわ。さあ、好きな席に座って。今お茶を淹(い)れるから」
そう促したものの、二人はまだ店内をきょろきょろと見回している。興味津々のようだ。やがてショウが四人席に腰を下ろしながら、ぽつりと言った。

「それにしても、カリンが店を出すのかぁ……すごいな」
「お祭りでの出店だけどね」
「いや、それでもさ」
「僕、絶対に食べに行くからね！」
「ありがとう、ラルク」
すると、ショウがふと真面目な声で言った。
「ラルク、祭りもいいけど、勉強は大丈夫か？」
「勉強？」
意外な言葉に、思わず私は聞き返してしまう。ラルクと勉強……正直、あまりイメージが湧かない。
「ラルクは、八歳になったら領都の全寮制の学校に通う予定なんだ。一昨日から、住み込みの家庭教師が来てるんだよ」
「うん、僕、ショウ兄ちゃんと同じ学校に行くことにしたんだ！」
「俺は……ちゃんと卒業してないけどな」
ラルクが元気よく話すのに対し、ショウは少し沈んだ声で呟(つぶや)いた。
「へぇ、そうなんだぁ……」
私はその呟きに、なんだか触れてはいけない気配を感じて、無難な返事で話を流す。多分、学校

で何かあったんだろう。それ以上は聞かないでおこう。ショウの表情が、そう語っていたから。
「はい、お茶が入ったわ。よかったら、これもどうぞ」
そう言って、私は昨日作ったケークサレをテーブルに並べる。断面から見える緑豆、コーン、人参が色とりどりで、見た目にも華やかだ。
「へぇ、これが屋台で出す料理？」
「ううん、違うの。これはショウとラルクが来るって聞いて、お茶菓子として用意したのよ」
「えっ？　俺たちのために？」
「うん、そうなんだけど……作ったって言っても、混ぜて焼くだけで簡単なのよ」
「全然そんな風に見えないな。美味そうだ」
「ねぇ、もう食べていい？」
ラルクが、我慢できないといった様子で目を輝かせる。
「ええ、もちろん」
私はくすっと笑って頷いた。
ラルクはさっそくケークサレを手に取り、一口食べて、目を丸くする。
「これ、甘くないんだね。でもすごく美味しいよ！」
「ふふっ、ありがとう」
「ほんとだ、すごく美味い。カリンって天才かも！」

「ショウったら、大げさよ。でも、嬉しいわ」
なんだか、ショウの印象が最初と随分違うような？　きっと最初は人見知りしてただけなんだろうな。
「私が屋台で出そうと思っているのは、『アイスクリーム』っていう、冷たくて甘いお菓子よ」
「冷たいお菓子？　氷果実（こおりかじつ）みたいなものか？」
「氷果実？　それって、シャーベットみたいな感じ？」
「シャーベットがどういうものか分からないけど……甘く煮た果物を細かく切って、凍らせたやつだよ。夏になると、領都や王都の屋台でよく売ってる」
私は「氷果実」とやらを頭の中で思い浮かべてみる。
「ヨダの町では売ってないの？」
「うーん……あんまり見ないなぁ。けっこう高いから、平民には手が届かないのかも」
ヨダの町には、貴族は町長だけらしい。その町長も男爵で、貴族としては下の階級。そう考えると、高価な氷果実はこの町では売れないのも納得だ。
「ふーん、なるほどね。じゃあ、私が作ったアイスクリームを持ってくるから、試食してくれる？」
「「待ってました！」」
二人の元気な返事に思わず笑いながら、私は厨房へと向かうのだった。

ミルクアイス、ミントミルクアイス、ベリーアイスを一つの器に盛りつける。白、薄緑、赤のマーブル模様のアイスは彩りも綺麗だ。因みにアイスクリームを丸くすくうディッシャーは昨日のうちに作っておいた。

お陰で丸くて可愛い三種類のアイスクリームが、三角形に器の上に並んでいる。満足のいく出来映えに思わず笑みがこぼれる。

「お待たせー」

テーブルの上にアイスクリームの三点盛りを持っていく。盛りつけられたアイスクリームを見ると、ショウとラルクが不思議そうな表情をした。

アイスクリームを凝視する二人の瞳。

「これ、食べ物なのか？」

「綺麗な色だね」

ショウとラルクは初めて見るアイスクリームに戸惑っているみたいだ。

「アイスクリームっていうのよ。さあ、どうぞ食べてみて」

私がそう言って促すと、漸く二人はスプーンを手に取った。

ゆっくりとアイスクリームをすくい、口に持っていく。二人とも同じようにベリーアイスから食べる様はさすが兄弟と言ったところか。

ベリーアイスをひとくち口に入れた途端、二人の動作が固まった。

「「冷たい！　甘い！」」

同時に声を上げる二人。さっきから同じ動作をするショウとラルクの様子に顔が緩んでしまう。

「……なっ、なんだこれは！　冷たいミルクの甘さにベリーの甘酸っぱさが口の中で溶けて、すごく美味い」

「カリン、すごいや！　こんなの僕、初めて食べた！」

「俺もだ。色んな所に行ったことがあるけど、こんな美味しい氷菓子は初めて食べた」

どうやら二人はアイスクリームを気に入ってくれたようだ。

「ショウ兄ちゃん、この薄い緑のアイスもミンティー茶の風味がして美味しいよ」

「本当だ。すーっとして爽やかな味でミルクに合っている。ラルク、こっちも食ってみろ。ミルクアイスもコクがあって美味いぞ」

二人は口々に絶賛してくれた。

「ありがとう、そんなに褒めてくれるなんて嬉しいわ」

「いや、本当に美味いよ。やっぱりカリンは天才だな」

ショウが大げさなほど褒めてくれるので、なんだか気恥ずかしくなってくる。

「うーん、でもこれ砂糖を使っているんじゃないか？　この前、森で砂糖の原料を見つけたと言っていたがそれか？」

少し考えてから言ったショウの言葉に、私はダンテさんが領主案件だと言っていたのを思い出

した。
　これって、ショウに言ってもいいのかしら？　でも、あの時私の言葉を聞いていたなら今さらか？
「うん、そうよ。でもダンテさんにこれは領主案件だから他に漏らさないようにと言われたわ。だから、ショウとラルクも他の人には内緒にしていてね」
「ああ、それは当然だ」
「僕も誰にも言わないよ」
　二人の言葉に私はホッとした。
　後でダンテさんを困らせたくないからね。
「じゃあなおさら、砂糖を使ったアイスクリームを店で出しても大丈夫なのか？」
「大丈夫じゃない？　言わなきゃ分かんないわよ」
　私は想定内のショウの言葉にそう答えると、なぜかショウは頭を抱えるのだった。
　あれ？　言わなきゃ分からないわよね。だって、命の泉の水を使った果実水をベッキーさんが飲んだ時も大丈夫だったし……
「いや、このアイスクリームという氷菓子は、どう考えても砂糖を使っていると分かるだろう？」
「うん、でも大丈夫よ。砂糖は市場で買ったのもあるからそれを使ったと言えばいいし、中袋二千五百ロンもしたけど、それだけでアイスクリーム三十個は作れる計算なのよ」

　私の説明にショウは暫し考え込んだ。
「うん、なら問題ないか。だったら怪しまれないように、それなりの値段を付けるべきだと思うぞ。王都で売られていた氷果実でさえ一袋二千ロンもしたんだからな。そうだな、これなら一個千ロンくらいだな。これだけ美味しいんだから、絶対それでも売れるよ」
　一個千ロン？　日本円にすると千円？　高っ！　前世でもシングルで五百円以内だったような気がするぞ。どんな高級アイスだよ！
「そっ、それはちょっと高すぎない？」
　私はショウに反論した。だって原価計算をすると、実際にお金がかかっているのは砂糖一袋分とミンティー茶だけだから、一個百ロンもしないだろう。それを一個千ロンなんて、ぼったくりもいいところだ。
「いや、お祭りではどの店でも多少上乗せして売るものだ。客は高揚感から多少高くても買うと思うぞ」
　うん、それは分かる。前世でも綿飴が一袋千円もしてビックリしたのを覚えている。原料のザラメの原価を考えると、それこそぼったくりに思える。でも、実は綿飴は中身よりも袋の方が高いと後で知った。なんでも袋に描かれたキャラクターの著作料が関係するんだとか。
　それでもなぜか買ってしまう。その根底にはいつも「お祭りだから」というよく分からない言い訳が出てくるものだった。それを知ってか、販売者も強気な値段を付けるのだ。

でも、私が売るアイスクリームはキャラクターが描かれた袋に入れるわけではないから、著作権料なんて関係ない。そもそもこの世界に著作権なんてあるのかどうかも定かではない。
「せめて七百ロンではどうかな？」
どうにもぼったくり感が大きく、罪悪感を拭えない私は、そうショウに聞いてみた。
「まぁ、金額を決めるのは最終的にカリンだからいいんじゃないか？　でも、安すぎても周りに弊害が出るから気をつけた方がいいと思うぞ」
うん、それも分かる。人々が安いものばかり追い求めると、価格競争が起こる。安くなければ売れないとなると、販売者や生産者の利益を削らなければならなくなる。すると収入が減り、経済に影響が出る。
まぁ、私一人が安く売ったところでそこまで大げさに考える必要はないだろうし、お祭りの三日間だけで影響が出るわけがない。
「じゃあ、決まり。一個七百ロンで、三個セットで二千ロンにするわ」
それでもまだ高いと思ったけど、ショウの意見ももっともだと思ったのでそう決めた。
「よかったら、俺、手伝うぞ」
ショウがありがたい申し出をしてくれた。実を言うと屋台といえど一人でお店をするのは少し心細かったのだ。初めての出店で、しかも異世界だし。
「ありがとう、ショウ。でも農場の手伝いは大丈夫なの？　それにショウは冒険者だから、また旅

に出る予定があるんじゃないの？」
「ああ、大丈夫だ。農場の手伝いは朝のうちに済ませるし、暫く拠点はここにする。結構お金も貯めているからすぐに働かなくても問題ない」
「そう？　だったらちゃんと賃金は払うわ」
「いや、賃金はいいよ。アイスクリームとかカリンの料理が食べられればそれで」
「もちろん、色々作ったらショウに食べてもらうつもりよ。でも、賃金は別よ。ちゃんと支払うわ」
「いや、いいよ」
「ダメよ」
「僕も！　僕もカリンの店を手伝う！　だからアイスクリームもっと食べたい！」
ショウと私が押し問答をしていると、ラルクが声を上げた。
「お前は家庭教師が来るから、そんなに頻繁にここに来られないだろ？」
ショウは溜息をつきながらラルクを窘める。
「でも、母さんはお祭りには行っていいって言った」
「分かった。祭りの時だけだぞ。カリン、構わないか？」
二人が手伝ってくれるのは嬉しいので、もちろん了承した。
賃金についてはこれ以上揉めたくないので、二人に何か美味しいものを作ろうと思う。
ショウには、お祭りに出すアイスクリーム作りから手伝ってもらうことになった。ラルクはお祭

りの前日からということになったけど、私としてはとてもありがたい。
お祭り当日まであと一月もない。私は「絶対に成功させるぞ」と自分に言い聞かせ、気合いを入れたのだった。

第二話　ダンテ・クランリーと領主

ダンテは久しぶりに旧友へ手紙を書くことにした。その相手は、この地を治める領主――ウォルフ・タングステン。彼とは王国最高峰の教育機関、ティディアール王立学園で共に学び、親友と呼べるほどの仲だった。
隣り合った領都を治める同じ侯爵家同士で気兼ねなく付き合えたこともあるが、ウォルフの気さくな人柄が二人の仲を深めた大きな理由だったのだろう。
二人の大きな違いは、ウォルフがタングステン家の嫡男であるのに対し、ダンテはカザフ家の三男だったことだ。生まれた時から次期領主として定められていたウォルフと、家を継ぐことがないダンテとは立場が異なる。
卒業後、冒険者として家を飛び出したダンテと、ウォルフの接点が殆どなくなったのは当然のことと言えた。

正確ではないまでも、領主となったウォルフの噂はそれなりに聞こえてくる。領民思いの領主であることくらいは。
手紙に書く内容は簡単である。「重要な話がある」、それだけだ。余計なことを書かなくても久しぶりの友からの手紙だ。それだけでよっぽど重要なことであることは察するだろう。
返事は数時間後に届いた。宅送鳥は、馬車では数日かかる距離でもその十分の一の早さで行き来できる。ウォルフの返事は「いつでも来て構わない。会えるのを楽しみにしている」とだけ綴られていた。

タングステンの領都エルドアの街へはヨダの町から馬車で片道二日はかかる。ダンテは今回は時間を短縮するため、騎乗して向かうことにした。
最高ランクである元プラチナランク冒険者だったダンテには、護衛などなくても問題ない。たとえ魔獣や盗賊相手でも、風の防御結界を纏い蹴散らすことができる。
ダンテの出身であるカザフ領は、風の精霊の加護を受けている者が多い。それはダンテも例外ではない。
現役時代は「迅風」と呼ばれていたこともあったのだが、ダンテはそんなことは恥ずかしくて家族には言っていない。
実は家族はみんなそのことを知っていたが、当の本人だけが気づいていない。そんなところも、

彼らしいといえば彼らしいのだが。
ダンテは風魔法を駆使し、二日かかるところを一日で辿り着いた。
エルドアの街に入ると、脇目もふらず領主邸を目指す。石造りの荘厳な館が徐々に見えてきた。
馬から降り、身分証を見せると門衛が慌てて中に駆けていった。すぐに燕尾服のような黒服を着た、家令らしき人物が顔を出した。
しっかりと整えられた白髪混じりの鳶色の髪と、目尻の深い皺が経験の豊富さを感じさせる。
「お待ちしておりました、ダンテ・クランリー様。私はウォルフ様に仕えておりますサルトルと申します。どうぞこちらへお進みください。旦那様がお待ちです」
丁寧に挨拶を述べたサルトルは、ダンテを奥へ案内した。

「よう、ダンテ久しぶりだなぁ、元気にしてたか？　最後に会ったのは、お前が冒険者を引退して結婚した時だったか。それにしてもお前、老けたなぁ」
「ウォルフ、相変わらずだな。その言葉、そっくりお前に返してやる」
応接室に入ると開口一番に憎まれ口を叩くウォルフに、ダンテは苦笑しながら答え、二人は固い握手を交わした。
ウォルフは赤みがかった短めの茶髪に、同色の口髭を生やしている。その出で立ちは威厳を感じさせるが、いたずらっ子のような焦茶の瞳がそれを和らげていた。

「ハハハッ、まあ座れ。それで？　重要な話ってなんだ？」
ウォルフはダンテにソファーに座るよう促しながら言った。
メイドがお茶を淹れて部屋から出るのを見送ると、ダンテはすぐに本題に入る。
「ウォルフ、お前はクラレシア神聖王国について、どれくらい知っている？」
「クラレシア神聖王国？　一年以上前にドメル帝国によって滅ぼされたあの国か？　当時は神に愛された国と言われていたあの国が滅んだ、ということで大分騒ぎになっていたな」
「ああ、耳にした時は俺も驚いた……」
「そうだろうな。だが、悪いな、俺もあまり詳しくはないんだ。クラレシアの難民はこの国でも受け入れているが……クラレシア神聖王国に一番近い、北の国境沿いのバスティナ領にはそれなりに難民がいるようだ。でも彼らは口が堅くて、情報を引き出すことができないらしい。まさか、難民を拷問して吐かせるわけにもいかないからなぁ」
ウォルフは溜息をついてから続ける。
「そもそも、タングステン領は、クラレシアからかなり離れている。俺は引きこもりだからなぁ。暫く王都にも行ってないんだ。面倒なことは全て息子に任せている。ただ、クラレシアの民は魔力量も豊富で、かなり高度な魔法も使えることだけは確からしい。さすが神の国の民だよなぁ」
ダンテはウォルフの話を聞いて確信する。
豊富な魔力量、高度な魔法……カリンが魔法で作ったナイフやバッグ、あれはやはりクラレシア

神聖王国の者特有のものなのだろうと。
「……実は、ヨダの町の近くに住んでいるカリンという少女と出会ったんだ。どうやら彼女は、クラレシア神聖王国出身のようだ。特徴がその国の民と一緒だし、この国の者よりもかなり魔法に関する能力が高い」
ダンテの言葉を受けて、ウォルフは息を呑んで目を見開いた。
「ヨダの町の近く？」
「ああ、ヨダの町の近くにあるガイストの森に住んでいる」
「ん？　森に住んでいる？　その子は精霊かなんかか？」
ウォルフは苦笑いをしながら、冗談を言うようにダンテに聞いた。
「ハハハッ、最初に会った時は俺も彼女にそう言ってしまったよ。でも残念ながられっきとした人間だ。ガイストの森の入り口付近に建てられた、店舗付きの家に一人で住んでいる。実際には猫と一緒だが」
そこまで言うと、ウォルフは頭を抱えてしまった。
「ダンテ、悪いな。お前の言っていることがよく分からん。なんで森の中にそんな家があるんだ？　それに、その少女が本当にクラレシア神聖王国の人間だとしても、一人でどうやってそこまで来たというんだ？」
ウォルフが当然の疑問を述べた。

まあ、森の家はともかくガイストの森まで一人で来た方法は、ダンテには見当がついていた。カリンの傍にいるただの猫にしか見えない神獣。きっとその神獣が連れてきたのだろう。
しかし、ウォルフにそれを言ってもいいのか？　言ったとしても信じてもらえるのか？　実際にその目で見たダンテにさえ信じられないものを、人から聞いただけでウォルフが信じるだろうか？
「ウォルフ、一つだけ確かなことがある。彼女の髪はクラレシアの民に特徴的な藍色――だが、瞳は瑠璃色だった。……この意味、分かるか？」
ガタッ！
ウォルフは咄嗟に顔を上げ、立ち上がった。その表情は先ほどよりも強い驚きに染まっていた。
「まさか……王族なのか？」
「ああ、多分間違いないだろう」
「分かった。話せ、詳しく聞かせてもらおうじゃないか」
ウォルフは再びソファーに腰を下ろし、ダンテがこれから伝える、とんでもない話を聞かされるのだった。
ウォルフが真剣に耳を傾ける姿勢を見て、ダンテはカリンとの出会いについて静かに語り始めた。
森の中にあるカリンの家には、特殊な結界が張られていたこと、珍しい果物をもらったこと、カリン自身が作ったという魔法バッグやナイフのこと、バターやチーズのレシピを教えてもらったことなどをかなり細かく伝えた。

しかし、暫く話したところでダンテの言葉が途切れた。
神獣グレンの存在を話すべきか――それが、ダンテの言葉が止まった理由だった。信じてもらえるかは分からない。だが、黙っていてはカリンがどうやって森に辿り着いたのかという疑問は解けない。
ダンテはそう考えてウォルフに全てを話すことにした。
「実はな、カリンと一緒にいた猫は、ただの猫じゃなかった。神獣だったんだ」
「神獣だと？　……いくらなんでも、それは突飛すぎる」
そう言葉にした後、窘めようとしたウォルフだったが、ダンテの真剣な眼差しに次の言葉を呑み込んだ。
「本当なのか？」
「ああ、俺もこの目で見た。猫が巨大化し、鳥のような白い羽が生えるのを。そこにいた俺の家族は全員見ている」
「神獣なんて、伝説でしか聞いたことがないぞ。こんな話、誰が信じるというんだ？　まぁ、俺はお前の話だから信じるがな」
ウォルフが溜息をこぼしながら続ける。
「それで？　まだ話は終わってないんだろ？　今度はなんだ？　神様でも現れたのか？」
ウォルフが冗談交じりに言った。

「お前、トーシャという植物は知っているか？」
「トーシャ？　ああ、あのガイストの森の彼方此方（あちらこちら）に群生している厄介な植物だろう？　毎年陳情書が来るから、もちろん知っているさ。最近では根を掘り起こすのも手間がかかるから、種がある穂先を刈り取って燃やすことにしているがな。これでそうそう増えることはないだろう？　何か問題があったのか？」
ウォルフが不思議そうな顔でダンテに尋ねた。
「トーシャの根の中に、砂糖の結晶が存在することが分かった」
「……砂糖？　砂糖って、あの菓子などに使われるあの砂糖か？」
「ああ、あの砂糖だ」
暫しの沈黙が周りの空気を包む。ウォルフは額に片手を置きながら考え込んだ。
「いや、待て待て待て、そもそもどうやってトーシャの根に砂糖の結晶があると分かったんだ？　トーシャの根は硬くて、そう簡単に割れないだろう？　火で燃やしてやっと割れる硬さだ。それに燃やせば中身は真っ黒になって、どう考えても砂糖の結晶とは言えないぞ」
「ああ、その通りだ。だが、カリンの作ったナイフを使ったら、トーシャの根を簡単に切ることができた。そして、その根の中には確かに砂糖の結晶があったんだ」
そう言って、ダンテはカバンから茶色がかった半透明の砂糖の結晶を取り出し、テーブルの上に置いた。

ウォルフはそれを見て目を見張る。
ダンテはテーブルの上に置いた砂糖の結晶の表面をナイフで少し削った。
「まあ、いいから味見してみろ。毒なんか入ってないさ」
そう言って、ダンテは削った粉を指に取り、舐めてみせた。
それを見たウォルフも恐る恐る指先に粉を付けて味見してみる。
驚愕したウォルフが呟く。
「本当に、トーシャの根の中から取り出したものか？」
「ああ、本当だ」
「そうか、だが、なんでトーシャの根に砂糖の結晶があると分かったんだ？　普通見ただけじゃ予想もつかないだろう？」
ウォルフの言葉にダンテが溜息をついた。
「そうだよな。実はそれを見つけたのはカリンなんだ」
「カリン？　クラレシア神聖王国から来たという、王族かもしれない少女か？」
「そうだ」
「もしかして、クラレシアにはトーシャが生育していたから最初から知っていたということか？」
トーシャはガイストの森以外で存在を確認されたことはなかった。ガイストの森は古くから大地の精霊の加護を受けていると言われている。果実や薬草が豊富に採れるのはそのためだろうとされ

ていた。
その恩恵にあずかったためか、ガイストの森があるタングステン領では、土魔法を得意とする者が多い。土魔法を使える者は茶系の瞳を持つ。
焦茶の瞳を持つウォルフも一応土魔法が使えるが、それほど得意ではなかった。そもそも、領主であるウォルフ自ら魔法を使うことは滅多にないのだ。
「クラレシアにトーシャがあったのかどうかは分からない。分かるのはカリンが見つけたという事実だけだ」
「そうか、だが、もしクラレシアにもなかったのに、カリンがトーシャの根に砂糖の結晶が含まれていることが分かったのだとしたら……」
ハッとして顔を上げるウォルフ。
「まっ、まさか！」
ウォルフの驚きの声を聞いて頷くダンテ。
「やっぱり、お前も気づいたか」
「ああ……カリンは、鑑定魔法が使えるかもしれない」
「そうだ。今や失われた『幻の魔法』――鑑定魔法だ」
「まあ、元々クラレシアにトーシャがあったというのなら、その限りではないがな」
ウォルフは腕を組んで考え込む。

「どちらにせよ、カリンという少女は危険に晒されるな」
ダンテはウォルフの懸念はもっともだと思った。万が一、カリンの力が知られたらその力を手に入れるためにカリンを攫おうとする輩が必ず出てくる。
普通の少女なら、たとえ魔力が高くても一人で回避できるとは思えない。
そう、普通の少女なら……
「だが、カリンには神獣が付いている。たとえこの国の王族だとしても、カリンを懐柔することはできないだろうよ」
ダンテが断言した。
「なるほど、神獣か。俺はこの目で見てはいないから、些か信じがたい。しかし、ダンテがそう言うなら信じざるを得ないだろう。それでだな、ダンテ、俺も一度カリンという少女に会ってみたいのだが、どうだろうか？」
ウォルフの言葉にダンテは顔を顰めた。
「お前がそう言うだろうとは思ってたが……カリンは、断るだろうな」
「ふむ、そこをなんとかできないか？」
「できないな。お前も分かるだろう？　カリンには神獣が付いている。何者もカリンに何かを強制することはできないだろう」
「はぁ、仕方がないな。まぁ、いずれ自然に会えるようになんとかするかぁ」

ウォルフは溜息をつきながら諦めきれない思いを口にした。
「ほどほどにな。無理にカリンに会おうとすると、カリンの傍にいる神獣がどう出るか分からない。俺は事を荒立てたくはないからな」
「ああ、分かっている」
ダンテの言葉にウォルフは頷いた。
「それにしても、なんでその少女の傍に神獣がいるんだ？」
「それは分からん。最初から神獣がカリンの傍にいたのか、カリンの窮地を知った神が神獣を遣わしたのか。まあ、クラレシア神聖王国の滅亡を考えれば後者の方だろうな」
「なるほど。とにかく、この案件は陛下に報告しないわけにはいかないだろう。まあ、現陛下は賢王として名高い。悪いようにはならないと思うが、こちらからも忖度するよう申し伝えるとしよう」
「ああ、頼んだ」
ダンテはウォルフの言葉に少し安心した。
トーシャの根やカリンの今後の扱いについては、ウォルフが陛下の反応を見て決定することになるだろう。
「それで……その少女にクラレシア神聖王国のことは聞いたのか？」
「ああ、それが……彼女は記憶を失っているようなんだ。国のことも、自分の身分すらも思い出せ

ないようだ」
　ウォルフはダンテの言葉に再び驚いた顔をした。
「……記憶喪失、か。なるほど、その子……カリンはよっぽど酷い目に遭ったんだろう。ダンテも気にかけてやってくれ」
「ああ、もちろんだ。ならば、カリンが森に住んでいることも問題ないな。あの子は勝手に住んで大丈夫かと気にしていたんだ」
「問題ない。そういえば、カリンは店を開くと言っていたな」
「まだ先だがな。今、商業取引委員会に登録申請中だ。セレンが手続きしている」
「そうか……」
　ウォルフの口角が僅かに上がるのを目にして、嫌な予感を抱えるダンテなのだった。

第三話　料理男子

　ショウが時々手伝いに来てくれることになったのはいいのだが、来る度にたくさんのお土産を抱えてくる。手伝ってもらっているのは私の方なのに、なんか申し訳ない。
「ショウ、ミルクも卵ももう十分よ。毎回、そんなに頻繁に持ってこなくても平気よ」

「ああ、そう思って今回は肉を持ってきた。カリンの家の食品庫は、時間停止機能と空間拡張の魔法付与があるから保存できるだろ」
「そうだけど、毎日のようにそんなに持ってきたら増え続けるだけだわ」
「店がオープンしたら必要になるんじゃないか？」
「うーんそうね、そういうことじゃないんだけど、まあいいわ。ありがとうショウ、店がオープンしたら使わせてもらうわ」
　私がそう言うと、嬉しそうに微笑むショウ。
　そんな笑顔を向けられると何も言えなくなる。
　いやー、本当に最初の印象と大分かけ離れてきたなぁ……これが本来のショウなのだろうか？
　そんなことを思いながら、私は手を動かし続けた。出来上がったアイスクリームは、厚紙で作ったバケツくらいの大きさの蓋付き容器に入れて食品庫にストックする。
　ショウは、私が女郎蜘蛛（アラクネ）の糸で作った白いエプロンをして卵をかき混ぜている。
　意外と似合いすぎるショウのエプロン姿に、思わず「さすがイケメン……」と心の中で呟いてしまった。もちろん、本人には内緒。
　ショウがたくさん食材を持ってきてくれるので、食品庫の中がかなり豊かになった。持ってきてくれたお肉は、ショウが自ら狩った動物や魔獣のお肉らしい。
　え？　魔獣？　魔獣って食べられるの？

疑問に思ってショウに聞いたら、この世界ではみんな普通に食べると教えてくれた。まあ、解体してあってただの肉の塊にしか見えないので、それなら問題ない。私の役目は、美味しく料理することだけなのだ。

せっかくだから今回は肉料理を作って、ショウにご馳走しようと思う。

「ショウ、夕飯食べていってね。ショウがたくさんお肉を持ってきてくれたから、美味しい肉料理をご馳走するわ」

「肉料理」の言葉に反応したのか、ショウの目がキラリと輝いたような気がする。

「いいのか？」

「もちろんよ。お店がオープンしたら、メニューに加えようと思っているレシピだから、是非食べてほしいわ」

「嬉しいなぁ、カリンの新しいレシピか。楽しみだ」

ショウのニコニコ顔に期待の色が見える。

この世界では新しいレシピなのだろうが、私にとっては前世で散々作ったおなじみのレシピ、ハンバーグを作ろうと思う。

ハンバーグって嫌いな人いないよね、ってくらい前世では誰にでも好かれた定番メニューだった。特に男子や子供はハンバーグって聞くだけで目をキラキラさせていたような気がする。

ショウも同じなんだろうなと思うと、つい頬が緩んでしまう。

ふと目の端にグレンが顔を上げて反応するのが見えた。

『もちろんグレンにも試食してもらうわよ』

私の念話に安心したのか、再びグレンは椅子の上で丸くなった。

「俺も手伝うよ。早く食べたいからな」

私がグレンの方を見ているとショウが言った。

「クスッ、そうね。じゃあお願いするわ」

結局ショウと一緒に厨房に立って作ることになった。

私がタマネギを切って炒めるうちに、ショウには塊肉を適度な大きさに切ってもらった。

それをフードプロセッサーに入れて細かくする。この時、以前炊いておいた玄米を少しだけ入れる。つなぎとなるパン粉がないので、その代用だ。

「なんで、肉を細かくするんだ？　食べ応えがなくなるんじゃないか？」

ショウも冒険者だから、お肉を自分で調理することはあったらしい。でも、お肉は塊肉を焼くか、一口大の大きさをスープで煮るかの二択しかなかったそうだ。

「お肉を細かくして纏（まと）めることで、柔らかくジューシーな料理に生まれ変わるのよ」

「ふーん、じゃあなんで米を混ぜるんだ？」

「お米はお肉がちゃんと纏まるようにするため、つなぎとして使うの」

「つなぎ？」

「そう、本来ならパン粉、つまりパンの粉ね、それを牛乳でふやかして使うのよ。でも今回はパンがないからお米を代用として使うの」
「ふーん、カリンはすごいな。よくこんなレシピを思いつくよ」
「ふふふっ」
私が考えたわけじゃないことに後ろめたくなって笑って誤魔化した。
お肉がいい具合に細かくなったようなので、ボウルに移し、卵とタマネギ、塩、胡椒を入れて手でこねる。ショウは私がコネコネするのをジッと見ている。
とても気になるようだ。これは料理男子になる日も近いかもしれない。
ハンバーグの種がしっかり混ざったので丸く成型する。ショウもやりたがったのでお願いした。
ショウが作ったものはかなり大きい。
たくさん食べたいという意思表示だろうか？
形が出来上がるとフライパンで焼いていく。ジュワーという音と共に、お肉の匂いが辺りに広がる。両面に焦げ目を付けたら弱火にして蓋をする。これでじっくり中まで火を通すのだ。
その間に付け合わせとして、マッシュポテトと人参のグラッセ、茹でたブロッコリーを皿に盛り付ける。
「うん、これでいいかな？」
ハンバーグにフォークを刺すと透明な肉汁が出てきた。どうやらちゃんと中まで火が通っている

らしい。先日作っておいたトマトソースをフライパンに入れる。森で採ったハーブの風味が効いて結構美味しくできたのだ。
トマトソースが煮詰まったところで火を止めてお皿に盛りつける。
パンがないので以前作ってストックして置いたケークサレを添えた。
「うん、できた」
そう言って顔を上げると、キラキラしながら料理を見つめる四つの瞳に気がついた。
料理男子候補者一名と神獣代表試食係一名（一匹かな？）である。
期待の眼差しを向ける彼らを背に、盛りつけた料理をテーブルに置いて私は言った。
「さあ、召し上がれ！」
ハンバーグを一口食べたショウとグレンは、驚いたように一瞬動きを止めた。けれど、すぐに目を輝かせて、夢中で食べ始める。
フォークで切ると肉汁が溢れ、そのうま味がハーブの効いたトマトソースと絡まって口の中に広がる。
「こんな美味い肉料理初めて食べた。やっぱりカリンは料理の天才だなぁ」
いつもの通り、大げさなくらい褒めてくるショウ。その言葉にもだんだん慣れてきた。
グレンは無言でモグモグ食べている。
あれ？　ハンバーグにタマネギが入っているけど、猫って食べちゃダメなんじゃないの？　と疑

問が浮かんだが、グレンは猫じゃなく神獣だったことを思い出す。
でも、普段のグレンを見ていると、やっぱり猫にしか見えないのよね……
食べ終わった空のお皿を寂しそうに見つめるショウ。その隣で同じ目をするグレン。その様子を見ておかわりのハンバーグをショウとグレンのお皿に載せてあげた。
目を輝かせて、さっそく皿の上のハンバーグにかぶりつくショウとグレン。その姿があまりに子供っぽくて、私は思わずくすりと笑った。
かなりハンバーグを気に入った様子だったので、その日はたくさん作ってクランリー農場のみんなにもお土産として持っていってもらうことにした。

◇◆◇

それから数日後、ショウからダンテさんが領主様のところに話をしに行ってきたことを教えてもらった。私はこのままこの森に住んでも大丈夫とのことだ。
トーシャの根のことは誰にも言ってはいけないけど、今まで通り私が採取する分には問題ないそうで安心した。
ただし、バレないようにしなくてはいけない。万が一トーシャの根のことが知れ渡れば、それを採取するために彼方此方から人が押し寄せることが予想されるからだ。

とはいえ、トーシャの根を採取したとしても根の中から砂糖の結晶を取り出すことは難しいだろう。今までだって硬すぎて割れないから砂糖の結晶が発見されなかったのだ。
トーシャの根の取り扱いに関しては、領主様が色々考えてくれるだろうから私はそれに従うだけだ。
ダンテさんにはショウから私がお祭りで出店することを伝えてもらった。

気がつけば、準備に追われるうちに時間はあっという間に過ぎていた。ショウが手伝ってくれたお陰で、アイスクリームの仕込みもバッチリだ。
お祭り前日の今日、私はいつもより早く起きてショウとラルクが来るのを待っていた。二人とも最初の宣言通り、屋台の設置を手伝ってくれるのだ。
カラン、カラン。
ドアベルが鳴り、店舗の入り口からショウとラルクが顔を出した。二人は私がいる時だけ店に入れるようにしてある。グレンにその設定の仕方を教えてもらったのだ。
「カリン！　いよいよだね。僕すっごく楽しみにしていたんだ」
ラルクが店に入るなり大きな声で言った。相変わらず元気がいい。
「ラルク、いらっしゃい。私もとても楽しみにしていたのよ。手伝いに来てくれてありがとう」
私はラルクに向かって笑みを浮かべた。

「カリン、準備はいい？」
「ええ、もちろんよ」
ショウに促され外に出ると、眩しい太陽の光が降り注いでいた。森の中では木々のお陰かそれほど暑さを感じなくても、町の中はここより暑いことが予想される。
今日はノースリーブのワンピースにして正解だったかもしれない。
三人で幌馬車に乗って、ヨダの町に向かった。もちろん御者はショウだ。
町の中はやはり森の中よりも暑く感じた。お祭り開催中もずっと暑さが続けば、アイスクリームが飛ぶように売れるかもしれない。そんな期待に胸が膨らんだ。
ショウがヨダの町役場の前で私を降ろしてくれた。グレンも私の後に続く。
役場の受付に行くと、おつりのための両替の希望を聞かれた。おつりのことをすっかり失念していた。
私はとりあえず銀貨三十枚を両替してもらった。足りなければ後でも両替してくれるとのことだ。
よかった、よかった。

会場の入り口では、自警団が入場者をチェックしていた。今日は出店する人のみ入場が可能だ。
私は役場の人に言われた通り、馬車から顔を出して受付でもらった番号札を見せて会場に入った。
大きな広場には石畳が敷かれ、その中央には周りを花に囲まれた妖精のオブジェが静かに佇んで

いた。その周りに等間隔に屋台が設置され、そのうちの一角には一段高くなったステージのようなものが作られている。
そこで何かお祭りのイベントでもするのかもしれない。
ショウが馬車を停めると私は番号札を確認した。
四十九番……
「何番？」
ショウの言葉に番号札を見せる。ラルクも私が持った番号札を覗く。
私たちは馬車から降りてその番号が記された場所を探した。
「あっ、あれじゃない？」
ラルクが指差した方向は、広場から北の道へ入る手前だった。石畳の上に大きく「49」と書かれている。広場の中心から離れていて、あまりいい場所とは言えない。
やはり、出店を申し込むのが遅かったせいだろう。ついつい溜息をついてしまった。それでもお店を出せるだけでありがたい。そう気持ちを切り替えて前を向く。
「あら～、カリンちゃんじゃなぁい？」
明るい声に導かれるまま顔を向けると、ピンク色の髪を揺らしながらこちらに歩いてくるフランさんが目に入った。
「フランさん！」

私は思わず顔が綻んだ。
「カリンちゃんのお店はどこ？」
「あそこです」
私は四十九番と書かれた場所を指さしながら教えた。
「あらぁ、随分端っこねぇ。でも、あの時申し込んだのなら仕方がないわねぇ。でも、大丈夫よ。私も知り合いに声をかけて、カリンちゃんのお店を宣伝しておくから。ところで何を販売するの？」
「ありがとうございます。アイスクリームという冷たいお菓子を販売する予定です」
「冷たいお菓子……」
その言葉に、フランさんの目がぱっと輝いた。
「よかったら後で試食しに来てください」
「まぁ、嬉しいわ。私もカリンちゃんに似合いそうなリボンを持ってきたのよ。お祭り前日の今日は、出店する人同士で物々交換するのが恒例なの。だから私のお店の商品と交換ね」
「そうなんですか？　嬉しい！　フランさんが作るのはみんな可愛いから楽しみだわ」
「あら、嬉しいこと言ってくれるじゃない。カリンちゃんはいい子ね。じゃあ、私もお店の準備があるから、後でカリンちゃんのお店に行くわね」
そこまで話してフランさんはショウとラルクに目を留めた。
「あら、カリンちゃんのお友達～？」

「はい、ショウとラルクです。出店を手伝ってもらってます」
「カリンちゃんは見る目あるわね～、二人ともとってもイケメンじゃない？　二人ともカリンちゃんのことよろしくね～」
ショウとラルクはフランさんの言葉に頬を染めた。
照れているのかな？
二人とも言葉が出ず、フランさんに軽く頭を下げるだけだった。

私たち三人は、指定された四十九番の場所へと向かった。グレンも辺りをキョロキョロと見回しながら、興味津々といった様子で後に続く。どうやら、お祭りがよほど気になるらしい。周囲を見渡すと、殆どの屋台は既に準備を終えていて、店主たちが談笑している姿もちらほらと見える。
自分の割り当てられた場所に着くと、屋台には布でできたカバーがかけられていた。
カバーを外し、屋台の天板を丁寧に拭き上げる。
それから予め作っておいたアイスクリームの写真付き看板を屋台の上に飾った。

カリンの美味しいアイスクリーム店

自分の名前が入った看板は、ちょっと恥ずかしい。でもこの店名はショウとラルクと三人で考えたものだ。私は最後まで反対したのだが、この町では店名に店主の名を入れることが多いそうだ。
やっぱり今後のことも考えて名前を売っておいた方がいいのかなと思い、意を決してこの看板を付けることにしたのだ。
私の屋台は一番端っこなので、右隣にだけ他の屋台が設置してあった。いや、よく見ると屋台には見えない。一人用の机のような台と上にある看板。その看板にはこう書いてあった。

よく当たる水晶占い

怪しさ満点。思わずツッコミたくなるような看板だった。
とりあえず隣の店？　には誰もいないので、私たちは広場にある他の店を見て回ることにした。
会場を見回すと、彼方此方で出店者同士が自分の店の商品を見せ合っている様子が見えた。フランさんが言っていた通り、物々交換をしているのかもしれない。
少し歩くとなんだかいい匂いがしてきた。グレンも鼻をヒクヒクさせている。
「あそこで何かお肉みたいなのを焼いている！」
ラルクがその匂いの元を突き止めて指を差した。
お肉みたいなもの？　お肉じゃなくて？　ラルクの言葉に少し引っかかりつつ、私はその匂いのする屋台をジッと見つめた。

「あれは！」
私は目を丸くして思わず叫んだ。
「ん？　どうしたんだカリン、そんなに驚いて」
ショウが不思議そうな顔をして私を見たが、私はその匂いの元の屋台が気になって目が逸らせない。
それは、前世でもよく食べたソーセージに似ていた。見た目だけじゃなく、味も前世で食べていたソーセージと同じだろうか？
これは確かめなくてはならない。
「行ってみましょう」
そう言ってショウとラルクを促して、私たちはお肉の焼ける匂いがする屋台に向かった。
その屋台の周りには匂いに釣られたのか、数人の出店者と思われる人が集まっていた。
「ゼフィロじいさん、いい匂いだな。それはなんの肉だ？　初めて見るが」
一人の男がソーセージを焼いているおじいさんに話しかけた。
ん？　どっちも見たことがある。ああ、ボル肉を買った時のおじいさんと、お客さんの方は……確か八百屋のおじさんだ。
「おう、ガンスか、これはボル肉の腸詰めだ」
「腸詰め？」

立ち読みサンプル
はここまで

「ああ、今まで内臓は捨てていたが、なんとか活用できないかと考えて研究してたんだ。いいから食ってみろ。美味いぞ」
「本当か？　内臓が美味いのか？」
「内臓を下処理して、肉と調味料を混ぜて詰めたんだ。おおっと、これ以上は秘密だ」
「よし、一つくれ、俺が味見をする」
そう言って、八百屋のおじさん……ガンスさんは、自分が持ってきたいくつかの野菜と串に刺さったソーセージを交換すると立ち去った。
私たちはその二人の様子をジッと見ていた。
「あっ、あの～、それってソーセージですよね」
私はソーセージを焼いているゼフィロじいさんに声をかけた。
「おお、アンタはこの間ボル肉を買っていった嬢ちゃんだな。その髪色と瞳の色はこの町では珍しいからよく覚えているよ」
「はい、この間はおまけのハムまでいただいてありがとうございました。とても美味しくいただきました」
「ん？　ハム？」
「あっ、ボル肉の塩漬けのことです」
しまった、ずっと自分の中でハムって言っていたから、声に出してしまった。